

新・作家訪問

# 河村正浩



文  
松尾正光

『根源的な農耕民族の哀歓を詠む』

河村さんには、

青年の尿いばり湧きたつ天の川

という句があり、この句から第一句集『青年』（昭58刊）の書名を得た。つまり、第一句集は元氣旺盛な一青年の〈尿り〉のようなものだ、というのである。

これは大変、謙虚な姿勢のようにも受け取れるが、同時に、未熟、粗削りなど技術的な枝葉末節は別にして、自分の俳句の気概そのものを忌憚なく批判して頂きたい、という要求でもある。

河村さんの師・大中祥生は、『青年』の序文の中で「河村正浩という作家の特質を一口で言えば、田園派詩人ということである」といい、

鳶の輪を背負い青田に熟れる母

月明に稲架組む父の影跳ねる

一揆の血燃やし青田の風を視る

囀りや一気に手放す父祖の山

などを引いて、「ただし、この田園派詩人は、単なる写生派ではない。彼の場合、きわめて重く個我に執する」「個の苦澁を深く掘り下げることにより、普通の真理を探るといって、根源的な農耕民族の哀歓に繋っている」と評した。

河村さんは昭和二〇年二月二日、父・河村君一、母・安子の長男として、山口県下松市大字温見まうみに生まれた。本名・正浩。

下松市は明治維新までは山陽道の宿場町として栄えたが、現在は重工業地として発展している。前方に瀬戸内海国立公園の一部に指定された笠戸湾の島々、後方に渓谷やダムを擁した絶好の景勝地である。

河村さんのお父さんは、元軍人で厳格な人柄だったが、代々の家業は農業。前掲のへ一揆の血燃やし青田の風を視る〜について、河村さんは「山間の棚田を眺めていると、高い年貢などで虐げられたに違いない先祖、むしろ旗を立て一揆もやったことだろう。そんな農民の血が僕にも流れているに違いない」という。

戦後のお父さんの口癖は、「農業ではダメだ。町へ出なければ……」だった。だから、「我が家の唯一の松茸山である父祖の山を一気に手放した」のである。

河村さんの幼少期は、普通の農村の腕白小僧とほとんど変わらない。運動神経はあまり発達していなかったという河村さんだが、村ではいつも腕白小僧の先頭にいた。小学校五年の時、宿題で、

毛糸編む母の手にはヒビが切れ  
新聞を読む父の顔微笑めり

を作り、先生に誉められた。

## 川柳から俳句へ

俳句の道に入った動機について、河村さんは「著名な俳人の秀れた作品を読んで感動したとか、俳句が大好きで始めたとかいっているではありません。動機はすごく簡単なんです」と説明した。

昭和四四年頃、武田薬品工業の光工場で、医薬品の理化学試験を担当していた河村さんは、親しくしていた女子社員が社内の露光俳句会に関係していたので興味を抱いた。その頃、川柳を齧っていたので、河村さんの句はある時は俳句、ある時は川柳のように見られた。最初の句会に提出した句、

的確か積乱雲背負い弓を射る  
夏夏夏夏が一番俺は好き

も、前句には点が入ったが、後句は「これは俳句ではない」と酷評された。

川柳の句会では「春の森童話の僕をつくりだす」で特選を得たが、河村さんは「穿ち・軽味・機知」といったものが苦手で、川柳には行き詰まりがあった。露光俳句会入会はその矢先でもあったのだ。

露光俳句会の講師は、「草炎」「青玄」両誌同人の西内利行である。

大手企業の文化活動の一つである俳句サークルは、勿論、秀れた俳人を養成する機関で



上 叔父と（3歳頃）  
中 妹と（小学6年生）  
下 宮島にて（高校3年生）



昭和47年 新婚の頃



昭和58年 娘たちと



平成1年 娘たちと

農した。

ダム光り父の放尿冬鮮明  
鮮かに霧噴くダムの父蒼む  
白髪梳く父の声充ちダムの春

お父さんはほうれん草、茄子、キャベツ、大根などの本格的な野菜栽培を始めた。本来なら農家を継ぐのは長男の役目である。しかし、お父さんは河村さんにけっして「家に帰れ！」とはいわなかった。遠くから息子の都会生活を見守っていたのである。

だから河村さんは、寸暇を惜しんで実家に戻り、家業の手伝いをした。河村さんがお父さんの反対を押し切ってまで大学に進学せず実業界に飛び出したのも、できるだけお父さんの負担を軽減させたい、という思いからであった。

新しい農業に挑戦したお父さんは、

月明に稲架組む父の影跳ねる

青田風這う地に耐えて麻痺の父

足洗う父が無口に柿熟れる

ぶらんこに揺れる父似の兜虫

などと詠まれた。

勿論、お父さんを詠んだ爽やかな句も少なくない。

父と飲むラムネ硬貨を転がして  
枯葦泳ぐ父一徹の身の軽さ

はない。しかし、指導者としては、やはり少しでもいい俳句、レベルの高い俳句を作らせるように心がけるのは当然であろう。

当時は沢木欣一、金子兜太らによって昭和三〇年前後から盛りあがった社会性俳句運動も次第に風化して、《新しい詩性》が模索される時代でもあった。従って西内利行の指導も、青春性の強いもの、社会性を超える更なる詩性、そして、それらの《情緒のバランス》を重視した、という。

二三歳の若々しい河村さんは、現役の弓道の選手であり、カメラの名手でもあった。身体は子鹿の四肢のように引き締まり、言葉は流暢、齒に衣を着せず臆すことなく喋り、感

## 『第一句集『青年』の世界』

動すればたちまち行動に移す。ロマンチックでもあるが、センチメンタルでもある。重厚とはいえないが、軽妙な明るい青年。といってもドライではなく、むしろ、ウェット。いつも父母のいるふる里を胸に抱き締め、句作の段になると、すぐ郷土に熱い心を寄せる《郷土派》であった。

従って河村さんには、お父さんを詠んだ句が多い。「農業ではダメだ。町に出なければ……」と主張するお父さんは、ダムの管理人になり、交通事故で身体障害者になって再び帰

腫の奥にちちを坐らせ盆太鼓  
父祖の愛煮つめ冬陽の俘虜となる

父の句の次に多いのは、母の句である。

畦焼きの母くろぐろと踊りだす  
鳶の輪を背負い青田に熟れる母  
毛蟹喰む母が田草をとる手つき  
言葉絶え松蟬の森抱く聖母

両親に敬虔な心を持てる河村さんは、幸せである。いつの時代でも、父、母は自分の心の中心でなければならぬ。

老婆の冬村の診療所は快晴

心臓に持病を持つ祖母を、隣村の診療所に付き添って行くのも、河村さんの役目の一つであった。診療所には「赤ひげ先生」と呼ばれる名物医師がいて、

「婆さん、まだ生きとったか。いい加減にくたばれや！」

「先生のお蔭でまだお迎えが来んのよ！」  
「赤ひげ先生」の診察は、遠慮はないがあたたかくて軽快な会話が始まる。

河村さんにとって、ふる里は暗いものばかりではない。

子を抱いて鬼くる村の曼珠沙華  
螢火の墜ちゆく底や写楽の眼  
新蕨を焼く落日の耳火照り



平成13年 台北俳句会主宰・黄靈芝氏と



平成15年 職場にて

裏山の秋を濃く塗り茄子出荷  
稲田に空岳転がし野の夫婦  
雪積んでかすがい錆びる父祖の村  
伐採の傷あおあとおと霧の中

これらの句をどう読むか。  
同門の高山幸子は、

口ほどの放蕩出来ず牡丹見る  
放蕩や水の上ゆく夏の蝶  
鳥あまたいて早春の火葉覚め  
幹太く育つ新緑基地の街  
山の気を寄せて螻蛄枯れはじむ

を挙げ、「この句集を貫くのは、現代感覚の中で捉えた土着の精神である」と評した。

### 生涯の師・大中祥生

河村さんは露光俳句会に入会した翌年の昭和四五年、本格的な俳句を目指して「草炎」主宰の大中祥生に師事した。従って、前掲の俳句の大半は、大中祥生指導後の作品といっている。

大中祥生は大正二二年、山口県生まれ。一八歳から作句開始。昭和二五年、「庶民の哀歓を現代の批評精神で捉え、抒物詩として定着させる」を目標に「草炎」を創刊。季刊、



平成17年 母及びブラジルの叔父と

隔月刊を経て四五年から月刊。師系は松原地蔵尊、日野草城とある。

河村さんは祥生の家を度々訪ねて、雑誌の編集などを手伝った。また祥生の吟行にも同道して、写真の腕前を大いに発揮した。

昭和五九年、「草炎」編集長。六〇年、生涯の師である大中祥生が、入退院を何度も繰り返した末に急死。享年六三。

ほろほろと酔うて師を恋う冬の虹  
石蹴って行くおぼろ夜の水溜り

師の齢算え春昼の影法師

潮騒のほかに音なし祥生忌

平成六年、河村さんは仲間と一緒に、主宰誌「山彦」を創刊した。地域の俳句活動に埋没する河村さんの現在の肩書は二〇に及ぶ。その活躍ぶりを第三句集「茫茫」の〈あとがき〉の中から拾うと、

平成元年、「さいかち」同人山本春穂氏らと下松市俳句協会を設立。平成三年、中国地区現代俳句協会事務局次長、同山口県支部事務局長として、中国地区現代俳句協会の発展的解散並びに山口県現代俳句協会の発足。平成四年には米泉湖文学碑プロムナードを提唱し、下松市米泉湖周辺に約二三〇基の文学碑の連なるプロムナードの実現を見た。平成六年「山彦」を創刊。平成八年からは山口県俳句作家協会常任理事として、山口県民文化祭山口県俳句大会の責任者としてその運営に携わっている。正に無我夢中であった。

という具合である。多忙を極めたため二足の草鞋に体力の限界を感じて、平成一五年、三九年間勤務した武田薬品工業を退職し、俳句一筋に生きることになった。

「恥をかきたい、そのために出すのだ！」と決意した昭和五八年の第一句集「青年」から見ると、平成一五年刊行の第三句集「茫茫」には格段の収穫がある。

たとえば、

二ヶ月のずしんと句碑の蒼さかな

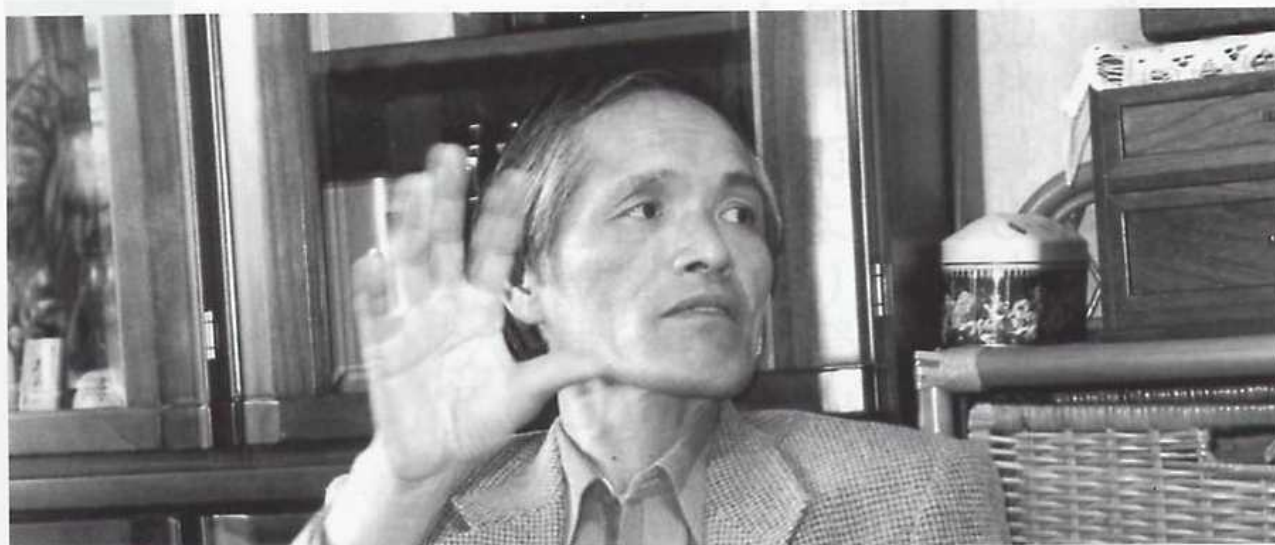
おぼろ夜の潮満ちてくる鍵の穴  
梅雨茸のひかりとなりておびただし  
菰蕩が好きで桜の木に登り  
俳句馬鹿くらげの海に目覚めたる  
豪快に笑つて冬のさくらかな

など。

〈正浩俳句〉は稔りを重ねつつも、まだまだ航海中である。現在、本誌の「一望百里」を執筆して下さっている。



平成16年 山口県下松市松澤昭文学碑にて 松澤昭氏と



## 「山彦」作品抄

山ほどのクッキー焼きて二月果つ 天谷京子  
 声高にヒロシマ語り墓洗う 石津嶺祐  
 表札は過ぎし日のまま秋桜 岩永松子  
 二人居にときは倦みて鳳仙花 河村正彦  
 花嫁の話にはずむ花の莫産 木下助治  
 ぞろぞろと貨車軋みゆく残暑かな 近藤道子  
 万緑に浸り目のない魚になる 佐藤富美江  
 七十きて渡れぬ橋や近松忌 白石牙子  
 石段をのぼりつめれば花の雲 福田操子  
 パチンコの玉ころげ落つ冬畳 山口正枝  
 放課後の廊下の長さ囁れり 秋山玲子  
 カラオケに目覚めし母の日なりけり 岡村楳代  
 燈ともせば離の囁き聴こえそう 栗林愛子  
 音のみな直線となる二月かな 河野悦子  
 白菜をざくり一刀陽のこぼる 小林絹子  
 新緑の競いて山の盛り上がる 実松瑞栄  
 大根を手足のごとく洗いけり 末廣瑛子  
 秘めごとの袂に重き花衣 土屋房美  
 車座にひらく花野の塩むすび 長尾 静  
 花野発花野行きなる縄電車 松谷靖子  
 聖堂を出て炎帝に躓けり 松本明女  
 薄墨の花につつまれおはん読む 飯田雅子  
 さざ波の白きが増して夏来る 井原三都子  
 豆腐屋の垂直に切る春の水 岡村清子  
 放尿の眼下ひろがる野焼き跡 片山放魚  
 一打追ふグランドゴルフ風光る 上河内由夫  
 着膨れて今日いちにちを省略す 木戸明子  
 萩の風むかしのままの駅がある 清水八重子  
 春浅し丈合ふ祖母の羽織かな 橋 美泉  
 一枝に温もり集め冬紅葉 怒和千代子

嘘一つ吐かぬ漢の懐手 藤井サカエ  
 春愁や写楽の顎のおきどころ 藤井康文  
 とびきりの秋天ありて鼓笛隊 古谷千代子  
 裸木にあの青空を開けておく 三野公子  
 水たまり跳んでみたくて春隣 村上邦子  
 好きだからメロン一夜でたいらげる 村上ツヤ子  
 日のさして初音に解けし山の黙 守田スミエ  
 ほろ酔うて三味弾く父や近松忌 矢野萬里子  
 怠け癖つき短日の捻子を巻く 石田美登江  
 海を呑み海を吐き出す海鼠かな 江本百合松  
 秋の蝶夫との距離を近づけて 大谷房代  
 クレヨンに塗りつぶされる師走かな 河本理恵  
 野点して外国人も梅を見る 郡山龍雄  
 阿修羅像逢ひに色なき風の中 近藤英子  
 運勢のページをめくり冬銀河 佐伯喜誠  
 枝ぶりを論じ枝なき苗木買ふ 鹿本保夫  
 案山子いま荷車の上凱旋す せいぎたかし  
 文化の日私しや死ぬまで勉強中 田中昌子  
 残雪に突っ立っている阿の呼吸 たむらのぶゆき  
 忘れねばならぬ今日こそ茗荷汁 千々和美佐子  
 人まばらラジオ体操寒の入り 中川房子  
 筋書をのらりくらりと花大根 花岡青児  
 草笛が荒城の曲のせてくる 藤井フジエ  
 生みたての卵まんまる日脚伸ぶ 藤井八重子  
 番犬の大きなふぐり冬温し 松村昭憲  
 横丁に薔薇のかほりの風がある 松本昭子  
 角砂糖ころがるそれも秋思かな 三牧義明  
 魂も海へ飛びけり大嘘 守田睦江  
 初螢闇に螺旋のあるごとく 山下山査子  
 言えぬこと多き母子や月見草 山下静波